竹中正夫の生涯

土肥昭夫

目次

はじめに
1　生い立ち、そして学びの舎にて
2　同志社大学における研究と教育
3　国内社会活動
4　エキュメニカル活動
5　著作活動
6　晩年

はじめに

竹中正夫先生は同志社大学の教授として、神学部に所属し、主としてキリスト教倫理学、宗教社会学の研究と教育に従事された。先生は学者であるだけではなく、労働者、市民の社会運動に関係し、その方法を指さし、事業を起こ

された。さらに、先生は書画をよくし、「悠芳」と号して、美術の世界を逍遙された。先生はこのような見識と素養を生かし、日本のみならず、アジア、世界各地の有識者と交流し、その啓発に努められた。これらを支え、貫いたものが、先生のキリスト教信仰とその理解であった。

筆者は、先生と同じ職場で働き、同世代であり、住居も近かったので、公私とも親しい関係にあった。いま、先生の逝去を悼み、その生涯をかえりみよう。その著作活動については、少し述べたが、改めて論述したい。これも一つの歴史的叙述であるから、本文では敬称を省略する。

1　生い立ち、そして学びの舎にて

竹中正夫は、一九二五年九月六日に中国の北京（ペキン）で生まれ、二七年に大連（ターリエン）に移住した。彼の編集・発行した『くるあさごとに――母・竹中　俊の生涯――』（一九七六年）によると、彼の父政一は満鉄理事をつとめ、母俊（とし）は音楽の素養豊かな人であった。彼らは山紫水明の地、丘陵にそびえる広大な邸宅に住み、千客万来の生活であった。一九三五年に父の退職に伴い、彼らは東京・大森、次いで大岡山に移住した。彼の父は退職後も仕事の関係で外地に出かけることが多かったので、母が正夫と三人の姉妹の養育につとめた。彼女（旧姓秋元）は実は東京音楽学校の出身で、卒業後一時は神戸女学院で音楽教師をしていた。その頃院長であったC・B・デフォレスト（Charlotte B. DeForest）に聖書を学び、キリスト教に入信した。この母を信頼し、尊敬していた彼は、キリスト教に親しみ、一九四〇年に組合教会の通称東大森教会（現日本基督教団大森めぐみ教会）で受洗した。

一九三八年に彼が入学した（旧制）成城高等学校というのは、四年制の尋常科（旧制中学校に該当）と三年制の高

等科（旧制高等学校に該当）より成り立っていた。この学校は、一九一七年に沢柳政太郎が教育の新しい研究・実験校として成城学園の一部につくり、知名な教育者もその教育に参画し、それなりに独自性のある私学であった。しかし、彼が在学していたときは国粋主義、軍国主義の盛んな時期で、その学校案内を見ると、国体観念の養成、団体的訓練の強化、自学偏重の是正、規律的生活の訓練などが教育目標として唱えられている（『成城学園五十年』一九六七年、一二八頁）。彼はこの高等科に二年しか在学しなかった。一九四二年八月の閣議決定により、旧制高等学校や大学予科は一年短縮されたからである。彼は一九四四年に京都帝国大学経済学部に入学した。父のように大陸で活動することを考えたからであろう（竹中正夫『生と死のはざまで――妻をしのびて――』二〇〇二年、四二頁）。しかし、アジア太平洋戦争の緊迫で、文科系学生の徴兵猶予停止の閣議決定（一九四三年一〇月）があり、その結果、四五年二月に彼は召集令状を受け、旭川の砲兵隊に配属されたが、後に陸軍主計に配置転換になった。

彼が軍隊生活で何を考えたかは、よくわからない。またその敗戦体験も同様である。ただ敗戦後六〇年のとき、「旭川の第二師団の兵営で〔天皇の〕放送をききました。懺悔と決意の原点となるときでした」（竹中正夫・百合子『年々歳々』二〇〇五年）というのである。

一九四五年一〇月に彼は京大に復学した。彼はそこで経済学のみならず、社会思想、哲学、さらに文学部で田辺元の懺悔道の特別講義を聴き、自らの思索を深めた。四八年に彼は京大を卒業し、（新制）同志社大学神学部の三年に編入学した。敗戦によって大陸で活躍する道は閉ざされたのみならず、「反省と懺悔の中に新しい道が探求されねばならないと思うようになった。かなり長い間の思案を経て」この道を選んだ、と彼は後に言う（竹中正夫『生と死のはざまで――妻をしのびて――』前出、同頁）。彼にとって、キリスト者の生活は神またキリストへの献身生活であり、教会における奉仕の生活であった。筆者は彼と同じ神学寮である此春寮で生活をともにしたが、物の乏しい時代に彼は

学校と自分の所属する京都教会の間を自転車で走り回っていたのを覚えている。

一九五〇年に大学を卒業した彼は、ミッションとの関係を得て、九月にイェール大学大学院神学研究科（Yale Divinity School）に入学した。そこで、修士を終え、五五年六月に大学院宗教学研究科社会倫理学専攻（Field of Social Ethics, the Department of Religious Studies, Yale Univ.）で Ph.D を受領した。彼の博士論文は「日本におけるプロテスタンティズムと社会問題の関係について」（佐々木敏二訳、住谷悦治編『日本におけるキリスト教と社会問題』みすず書房、一九六三年）である。この論文で彼は近代日本の福音宣教の担い手、その受容者、その歴史的状況から説きおこし、キリスト教と中産階級の都市知識人との結びつき、国家主義的絶対主義の潮流の中でなお独自の行動をしたキリスト教社会主義者、社会的キリスト者、内村鑑三とその群れ、植村正久に代表される長老派に注目する。そして近代日本の教会と社会問題の関係を九つの問題点に要約する。それらは、彼が日本の社会に生きるキリスト者としてつねに考えてきたことであるが、さらにこの神学校でキリスト教と文化の問題を論じたH・R・ニーバー（H. Richard Niebuhr）、産業社会と教会の関係を宗教社会学的に分析したL・ポープ（Liston Pope）らに学んだ論述を展開している。この二人はその後の彼の研究に著しい影響を与えた。

イェール大学在学中に彼は歓喜に溢れた体験をした。五二年六月六日に彼はかねてから婚約中の林文子と、敬愛する教会史家R・H・ベイントン（Roland H. Bainton）教授の司式で結婚式を挙げた。彼女は戦中、戦後と辛酸を重ね、上海（シャンハイ）よりひとりで引き揚げてきた、芯の強い女性であった。彼女は京都教会で彼と知り合い、神学校に学ぼうとし、また学んでいる彼を励まし続けた。彼女はイェールに学ぶ彼を追って五一年に留学し、文通を重ね、結婚後は彼の生活を支えた。長男の真は彼らの在米中の愛の結晶であった。

2　同志社大学における研究と教育

彼はイェール大学におけるドクター・ワークを終えて帰国し、一九五四年一一月―五五年三月に倉敷教会長期応援教師としてこの地に滞在した。そこにおける風土、文化のふれあいや教会関係者との交わりは、後の大著『倉敷の文化とキリスト教』（日本基督教団出版局、一九七九年）の執筆を促し、それを支える一つの契機となった。

一九五五年四月に彼は同志社大学に神学部所属として助手に招かれ、五六年に助教授、六一年に教授に選ばれ、九六年に定年退職するまで、活発な学内活動を続けた。彼は、学部では、いわゆる一般教育科目で宗教学、後に総合科目で「日本の近代化と同志社」を他の教授たちと担当し、いわゆる専門科目でキリスト教倫理学概論、ときにはアジア・キリスト教史、キリスト教と文化、キリスト教と美術、キリスト教とマルクス主義、宗教と経済を主題として講義や演習を行なった。大学院では、現代キリスト教倫理、ときには宗教社会学、エキュメニカル運動、アジアの宗教と社会を主題として講義や演習を行なった。

一九六五年四月より彼は神学部長を一年間つとめた。この年の一月に神学部寮である此春寮を大学の一般寮にする問題で此春寮生と神学部教授会との間に見解の対立があり、五月一八日の大衆団交で教授会は此春寮に対する一切の権限を放棄した。その後この問題などでいろいろな見解の対立があり、結局彼は部長職に再選されなかった。一九六八年よりいわゆる大学紛争が全国各地で起こり、同志社大学も例外ではなかった。神学部では、六五年パンフで公にした神学教育の理念やカリキュラムについて教授たちと学生たちの激しい大衆団交が繰り返され、教授会は六五年パンフの放棄や全科目を原則的に選択科目とすることを決めた。彼は後に「六八年から七〇年に至るいわゆる大学紛争の中で学生たちは色々な要求を揚げたが、その多くは政治的スローガンであったり、否定的ナンセンス論が多く罵声

となったが、建設的な響きは少なかった」と彼らしい感想を述べた。しかし彼は同時にその中でいわゆる「専門馬鹿」に終わらず、専門の違う者たちが集まって、同志社でなければ出来ないような学際的研究を考えていた。これは未発表であるが、彼の自伝稿「生命の泉――わたしのこころの記録から　想い出　めぐみのせせらぎ――想い出ずるままに」に述べている。次に述べるキリスト教社会問題研究への取り組み、アメリカ研究所における兼担教授活動などに見るとおりである。

キリスト教社会問題（以後ＣＳと略記）研究会の創設とその充実への彼の参与は、銘記されるべきである。一九五六年二月に学内関係者一五名が住谷悦治を代表者として近代日本のキリスト教と社会問題をいわば学際的に研究することを呼びかけた。そのなかには田畑忍（憲法学）、和田洋一（新聞学）、嶋田啓一郎（社会学）、篠田一人（哲学）、西村豁通（経済学）など知名の人々がいた。竹中もその一人であった。彼はその経歴が示すように、神学のみならず、社会科学に理論的にも実践的にも関心が深く、この研究会の強力な推進者のひとりとなった。この研究会は、同年四月に文部省より科学研究費三〇〇万円を受け、種々の研究集会の開催、年刊『キリスト教社会問題研究』の発行、文献、資料の購入をすすめ、五九年四月より人文科学研究所の一研究部門としてその活動を進めた。彼は一九五七―五八年におけるアメリカン・ボードのJapan Year Projectに招かれ、その本部を拠点として一年間全米各地で講演をしたが、その機会に彼はハーヴァード・エンチン研究所を訪れ、同志社大学における上述の問題研究の重要性を訴えた。これが機縁となって、この研究会は同研究所より一九五九―七三年と長期にわたり毎年約三〇〇万円の援助を受けた。一九八九年に人文研は彼を代表者としてカナダの日系人社会とその教会を主題とする研究会を組織し、カナダ政府より日加研究賞を受けた。これは日本の私学では最初の受賞であった。

彼は前述のようにＣＳ研究会の財的充実に尽くしたが、同時にその運営にも尽力した。彼は『ＣＳ研究』の主要寄

稿者のひとりであったが、一九六三―七〇年に研究会の代表として骨身を削ることを厭わなかった篠田一人の後を受けて、一九七一―八〇年に代表をつとめた。その間、四回にわたる研究会の編成替え、『特高資料による戦時下のキリスト教運動』三巻、『日本の近代化とキリスト教』、『松本平におけるキリスト教』などの刊行、各地の教会文書の収集と整理の監修に尽力した。一九八〇―八一年も彼は所長を委嘱されたが、八一―八二年にハーヴァード大学訪問教授に招聘されていたので、それを継続することは出来なかった。しかし、その後も彼がこの研究会の主要メンバーであったことは、周知のことである。

3　国内社会活動

竹中正夫は、いわゆる象牙の塔に閉じこもる学者ではなく、神学者でありつつ、同時に社会活動に参画した。

先ず、日本基督教団における職域伝道専門委員としての活動である。一九五〇年一〇月に教団は機構改革により綜合伝道委員会を設置し、翌年に上記の専門委員会を加えた。この専門委員会は、職場聖研、労働学校、福音学校の開催、次いで労伝を望む教会における職伝センターの設置、労働聖日の設定、月刊紙『働く人』の刊行などをした。竹中は一九五六―六六年に委員に選任され、その企画やときには活動に参加した。特に専門委員会が一九五九年九月に西部職域伝道協議会を同志社大学神学部の後援で開催したときは、彼はその企画と運営をリードした。この会は、イエール神学校教授P・マイネア（Paul Minear）の聖書研究、労働者伝道に関する教会指導者の講演、労組指導者の問題提起、労伝に携わっている教会牧師の提言と多彩なプログラムであった。彼が編纂した『教会と労働者――西部職域伝道協議会記録――』（日本基督教団出版部、一九六〇年）はその記録の他に、教会と世界の主なるキリストの主権

を提唱した世界教会協議会の文書、エヴァンゲリッシェアカデミー運動の指導者A・シュミット（Alfred Schmidt）の講演草稿を収録する。これらは彼の当時の関心と見解の素材のありかを示すものである。この職伝委は一九六八年の機構改正で事実上消滅した。

第二は、初期の関西労働者伝道への参与である。一九五六年一月に京阪神のキリスト者有志が労働者伝道後援会を結成した。それを促したのは教団大阪教区青年部（部長三井久）労働者伝道研究会の人たちであり、教団職伝専門宣教師H・ジョーンズ（Henry Jones）であった。後援会は翌月「労働者伝道後援会趣意書」を発表した。それは、教団職伝の後を受け、教会と労働者の間にある溝を埋めるために、労働者の住む地域の開拓伝道、労働者とキリスト者の交流を深めたい、そこで専任者の養成と派遣をすることとし、その支援を要請する、というのである。やがて労働者伝道に専従する者、それに一定期間協力して問題に取り組むインターン生、牧師、神学校教師の協力態勢が生まれた。六〇年に彼らは「労働者伝道の使命草案」を作成した。それは、この伝道は今日の産業社会に働く人たちにキリストにある人間性の回復を目的とし、彼らの経済的、社会的問題を共に担い、社会正義の実現に共に働くことを明らかにした。

この伝道に携わった人たちは、先ず労組を問安した。当初は疑心暗鬼の目で見られ、忍耐と労苦を要した。しかし、六〇年代には、信頼を得、総評や全労（後の同盟）の活動の一端を担うようになった。さらに七〇年代になると、彼らは未組織労働者、釜ケ崎に集う日雇い労働者、その不就学児、被差別部落の人たち、在日韓国・朝鮮人との交流を続け、その人権問題を共に考え、行動する道を歩んだ。また、労働者が密集する地域に伝道所・教会が三箇所設立された。それらは、既成の教会の形にとらわれず、その地域の人たちがふだんの生活の場として集まり、話し合える「家の教会」であった。

一九五八年に同志社大学神学研究科を修了した平田哲（さとし）、金井愛明、六二年に同志社大学神学研究科を修了した小柳伸顕が結局専任者として活動した。彼らの協力牧師には三井久、三好博、益谷寿、村山盛忠などがいた。

竹中は神学校の教師としてインターン生の指導に当たり、専任者を支援し、労伝に関する理論的見解を述べ、自分の国際的交流関係を活用して、関西労伝の活動を国際的に紹介していった。彼が編纂した『働く人間像を求めて　関西労伝ノート・その20年』（新教出版社、一九七八年）は『福音と世界』寄稿の論文や座談会、関西労伝機関紙『労伝レポート』その他よりその活動を生き生きと伝えている。特にインターン生が戸惑いやときには疑問を覚えつつもそれに学ぶことの多かったことを述べている。そこに彼の努力があったことはいうまでもない。この書物の刊行が関西労伝に対する彼の関わりの終焉になったようである。

第三は、西陣会の設立と運営への参与である。これについては『絆　共に生きる未来を求めて　財団法人西陣会30周年記念誌』（一九九二年）に述べられており、特にその開拓期（一九六〇―六八年）は彼の執筆である。

京都の西陣は、独自の織物を生産する伝統的な地場産業の地域であったが、戦後のめざましい技術革新や企業の合理化にともない、斜陽の道を辿った。長時間労働や労働者の高齢化と減少は深刻であった。一九六〇年五月に西陣のゆくえを案じる同志社大学、地元の教会、ＹＭ、ＹＷの有志が西陣会を結成した。その中心的人物が竹中であった。彼は関西労伝の一環としてその活動を進めた。当時同志社大学神学部は世界教会協議会（ＷＣＣ）に関係する神学教育基金（ＴＥＦ）よりアジアにおける神学教育の五つの拠点の一つとされていた。同学部は都市産業伝道を実施するためにＴＥＦに援助を申請し、それが得られたので、西陣に土地を購入した。西陣会は同志社とこの土地の無償譲渡の了解のもとに教会や地元の業者などの協力で労働センターを六二年一二月に建設した。学びと交わりの多彩なプログラムが実施され、関西労伝の一人の専任者や数名のインターン生もそれに参加した。それはＴＥＦの方針に合致し

たものであった。

もともと西陣会は、この地域に働く人たちの福利厚生、文化事業をするために結成されたのであり、「労働」という言葉に対する地元のアレルギーを除くために、一九六八年四月に市民センター、さらに事業の性格を明らかにするために、九二年四月に市民福祉センターと名称を改めた。またすでに六一年三月に財団法人の認可を受けていた西陣会は、八〇年四月に同志社よりその土地の無償譲渡を受け、八一年一二月に総合児童館として旧館を改築した。竹中は西陣会を生み、支えた人であり、六二年よりセンター理事、七〇年より理事長をつとめ、八九年に理事長を退任した後も、代表顧問として遇された。彼はこの類の事業に見られる困難とたたかい、その維持と運営に尽くし、そのプログラムにしばしば参加した。彼がセンター建築のために多額の献金をしたことは、記録に明らかである。

第四は、クリスチャンアカデミー運動への参与である。この運動はもとドイツにおいて告白教会の流れを汲む人たちの提言で戦後ドイツの再生を願い、様々の分野の人たちが数日間共同生活を送り、話し合う行動（Tagung）をしたエヴァンゲリッシェアカデミー運動のことである。ドイツでは、アジア、アフリカのなかでいちはやく近代化、産業化を実現した日本がアカデミー運動を受け入れ、その先駆者になってほしいという期待があり、一九五七年に前述のA・シュミットが来日した。翌年夏に杉山元治郎、阪田素夫、斎藤一路がヨーロッパのアカデミー指導者会議に出席し、アカデミーの創始者E・ミュラー（Eberhard Müller）は四度も来日した。松村克己は彼の著『生活の中の信仰――信仰の再認識』を一九五八年に翻訳した。ここに述べた人たちは日本における運動の有力な推進者となった。

一九六〇年二月に日本クリスチャンアカデミーは最初の理事会を開き、東西運営委員会を組織した。翌年五月にアカデミーは財団法人として認可され、初代理事長に杉山が選ばれた。竹中正夫編『はなしあいの展望　日本クリスチャンアカデミー三十周年記念』（日本クリスチャンアカデミー、一九九〇年）一〇六頁によれば、彼はアカデミーに社

会のあらゆる分野の人たちが参加することを望むが、それを支えるのはキリスト者でなければならないから、クリスチャンアカデミーというべきであるといった。なおエヴァンゲリッシェという教会用語が日本ではあまり馴染みがないからクリスチャンアカデミーと命名されたとも思われる。一九六三年に大磯アカデミーハウス（八八年に箱根に移転）、六七年に関西セミナーハウス、七八年に北海道の白老アカデミーハウスが開所された。その建設はドイツ、アメリカの教会、日本の財界の支援を必要とした。それも大変な事業であったが、その運営、維持も困難をきわめた。

アカデミー運動に対する竹中の関心は強かった。彼は一九五八年八月末にアメリカよりの帰途、アカデミー発祥の地であるドイツのバート・ボルにおける集会に参加した。この世界の全領域における神の働きに対する信仰のもとに他者のための存在としての教会をみるという視点を習得していた彼は、この運動にその一つのあり方を実践的に学んだ（竹中正夫「海外における労働者伝道」『福音と世界』一九五八・一二）。日本でアカデミーが創設されると、彼は関西運営委員に選ばれた。アカデミーが財団法人になると、彼はその理事を一九六二―九七年に、理事長を一九九七―二〇〇三年につとめた。

また彼の貢献はアカデミーの理論と実践に関する論文集を編纂したことである。それらを列挙すると、『現代社会における話し合い』（関西セミナーハウス、一九六七年）、『現代社会のなかで』（同上、一九六九年）、『対話の探究』（キリスト新聞社、一九七二年）、『ときとひとのあいだで』（関西セミナーハウス、一九七四年）、『対話の展望　一九七七年全国活動委員会報告』（日本クリスチャンアカデミー、一九七七年）、『現代における宗教の対話』（聖文舎、一九七九年）、『はなしあいの展望　日本クリスチャンアカデミー三十周年記念』（前出）、『松村克己　はなしあいのこころ』（同上、一九九二年）、共編『生命の意味』Ⅰ、Ⅱ（思文閣出版、一九九二年）、共編『労働と人間を考える』（中央経済社、一九九四年）である。これらの書物に彼は序文のみならず、論文を寄稿した。ここにも論文集に対する彼の熱

意をくみとることが出来る。

アカデミー運動に対する彼の熱い想いは、修学院に設置された関西セミナーハウスの維持、運営への参与に見ることが出来る。そこは「洛北の閑静随一の場所、京の特別風致地区、緑地地区、而して古都保存法適用の中心地」（嶋田啓一郎）にあり、一九六二年五月に篤信の実業家野田鋳五郎より土地二〇〇〇坪と能舞台を譲り受け、そこに風格のある建物が建てられた。彼はその佇まいを愛し、そこを人たちのいこいとはなしあいの場、キリスト教と日本文化の交わりの実践の場とするように配慮した。ドイツで研鑽を積んだ初代の所長村山盛敦（一九六三―七六年）、その維持、運営に懸命であったドイツ人の宣教師K・シュペネマン（Kraus Spennemann, 代行、一九七六―七七年）、関西労伝の経験を生かし、ここを新しい職場とした二代目所長平田哲（一九七七―九七年）、慎ましく、しかも有能な活動主事杉瀬喜與子（一九六二―八九年）などは、長期にわたり、よき協力者であった。関西セミナーハウスは、白老や箱根のハウスが維持困難のため閉鎖されたので、日本クリスチャンアカデミー唯一の施設となった。ここで全日本金属産業労働組合（ＩＭＦ・ＪＣ）西日本労働リーダーシップコースが開かれた。彼はこのコースで一九六九―二〇〇六年に毎年校長に選ばれ、三〇―四〇名の参加者に労働における人間倫理の重要性を語り、彼らとの出会いと交わりを大事にした（渡辺美知夫「人間校長・竹中正夫先生を偲ぶ」『友へ』一二二―二三頁）。

4　エキュメニカル活動

竹中は、幅広く世界を舞台にエキュメニカル活動を活発に展開した。

先ず、世界教会協議会（ＷＣＣ）関連の活動より始める。二〇世紀前半に起こった国際宣教、信仰と職制、生活と

実践に関する世界的組織が第二次世界大戦を経てWCCに結集した。その世界大会は、第一回（一九四八・八、オランダ・アムステルダム）、第二回（一九五四・八、アメリカ・エヴァンストン）、第三回（一九六一・一一、インド・ニューデリー）、第四回（一九六八・七、スウェーデン・ウプサラ）、第五回（一九七五・一一、ケニア・ナイロビ）、第六回（一九八三・七、カナダ・ヴァンクーバー）、第七回（一九九一・二、オーストラリア・キャンベラ）、第八回（一九九八・一二、ジンバブエ・ハラーレ）、第九回（二〇〇六・二、ブラジル・ポルトアレグレ）と続いた。

彼は、第二回大会の会期がアメリカ留学中であったので、これに傍聴者として出席したようである。このとき彼はキリスト教社会倫理の指標としてのResponsible Societyの概念、教会と社会におけるLaityの重要性を学んだ。彼は帰国後、WCCの信徒部門の幹事H・R・ウェーバー（Hans R. Weber）の論文を集めて『信徒・教会・社会　この世における神の民』（日本基督教団出版部、一九五九年）を翻訳し、刊行した。また今日のアジア、アフリカ、南米における社会の急激な変化に対する教会の役割を明らかにした世界教会協議会社会部の報告書『社会的激変に対決する教会』（新教出版社、一九六一年）も翻訳し、刊行した。しかし、彼がエキュメニカル運動の世界で知られるようになったのは、第三回大会においてであろう。彼はこの大会の意義を日本の教会に伝えるため、『福音と世界』（一九六一・四、六二・三）に平明な論説を寄稿し、その大会報告書『世の光キリスト』（同社、一九六二年）を共訳し、詳しい解説も付けて刊行した。*The New Delhi Report: The Third Assembly of the World Council of Churches* (SCM Press, 1962) によれば、一一月二〇日に諸教会のWCC加入申請の承認、中央委員会報告の後、“Witness and Service”という表題のもとで、P・デヴァナンダン（Paul Devanandan）教授の主題講演と討論に続き、“Called to Service”と題する彼の主題講演と討論があった（pp.13-14）。彼はそこで、この世界に対するキリスト者のミニストリー（彼はこれを聖務という）はキリストのミニストリーへの参与であり、それは教会の不可欠な印である、それはキリスト教信仰の光においてな

されるこの世の出来事への参与である、キリスト教の奉仕は全人間に及び、社会正義に関わる、その社会生活をとおして教会に仕える信徒の役割は重大である、この考え方は今日の教会の最も感謝すべき進歩の一つである、と平生の確信を端的に唱えた。彼の提言は肯定的に受け取られたが、キリスト教の真の奉仕とは何かを改めて明確にするべきであるという意見も述べられた、という。

彼は第四回大会には代議員として日本基督教団より選ばれて出席した。彼はこの大会を前にして、世界の教会の動向を述べ、日本の教会の独自の課題を論じた（「世界の中の日本の教会」『福音と世界』一九六八・三）。また彼は大会のメッセージと六の分科会の報告に解説を加えて『連続と変革　ウプサラ・レポート』（日本基督教団出版局、一九六九年）を編纂・刊行した。彼はこの大会でエキュメニカル活動委員にあげられた。

その後の大会に対する彼の参与については、筆者には不明である。しかし、彼がＷＣＣについて深い関心を持ち、今後の展望を論じていたことは明白である（「エキュメニカル運動50年の総括と展望」『福音と世界』一九九九・一）。その意味で、関西労伝で交流が深く、平田哲の連れ合いである平田真貴子が第七期、第八期に中央委員に選ばれ、活動したことを彼はうれしく思ったにちがいない。

つぎに、アジアのキリスト教組織における彼の活動を見よう。これまでの叙述より明らかなように、それは労働者伝道に関わる活動であった。一九五八年六月に彼はＨ・ジョーンズらと協力してアジア産業労働者伝道協議会をマニラで開催した。このとき講師として招いたＷＣＣの都市産業宣教部幹事北川台輔とは親交を得、その尽力でオランダの研究所より近代日本の社会事業の発展に関する小冊子を翌年刊行した。ＷＣＣと国際宣教協議会（ＩＭＣ）の支援で東アジアキリスト教協議会（ＥＡＣＣ）が五九年五月に創立総会を開いたが、その主題“Witnesses Together”のもとに彼は主題講演をした（竹中正夫「東南アジアに旅して」『キリスト教学校教育』一九六一・七）。彼はこの年より

一九六七年まで The Witness of the Laity 委員会の議長をつとめた。一九六六年五月にＥＡＣＣ主催のアジア産業信徒会議が京都で開催されたが、彼は関西労伝の人たちと共にその運営に尽力したにちがいない。一九六八―七三年に彼は The Urban Industrial Mission 委員会の議長をつとめた。このＵＩＭは七三年に Urban Rural Racial Mission と改称してその活動の意味を明確にした。

少し年代はさかのぼるが、一九六一年一一月のＷＣＣ第三回世界大会に先立ち、ＥＡＣＣは南インドのバンガロアで The John R. Mott 記念講演会を開催した。彼はその講師の一人として "The First Fruits in Asia" という題目で二回話した。それは *Christ's Ministry—and Ours* (Singapore, 1962) として出版された。彼はそこで教会のミニストリーを主にして僕となられたキリストのミニストリーに基礎づけて行使しなければならないとし、そこからアジアのキリスト者や教会の新しい生き方を提示し、関西労伝を今日の産業社会における最初の実りとして紹介した。

これまでの記述でも明らかなように、彼はごく自然に海外の人たちと親交を重ね、共に活動することが出来た人である。前節で述べたＨ・ジョーンズとの親交もその一つである。ジョーンズは友人とアジアの都市産業伝道情報誌 *Church Labour Letter* (CLL) を一九五四年一月よりほぼ年三回、ジュネーヴ、次いで大阪で編纂・発行していた。彼はそれに寄稿したのみならず、一九五九―一九七五年にその仕事を受け継いだ。ＣＬＬについては彼の論考「アジアの労働者と関西労伝」(『働く人間像を求めて　関西労伝ノート・その20年』前出) に詳しい。彼はイェール神学校時代の学友Ｇ・トッド (George Todd) と親交があり、トッドがＷＣＣ―ＵＩＭの幹事をしていたとき、一九六八―七五年にその委員会の委員長をつとめた (George E. Todd "A Letter to My Friend Masao Takenaka" 『友へ』三七―三九頁)。また一九六七年にインドのＨ・ダニエル (Harry Daniel) を説得してＥＡＣＣ―ＵＩＭの幹事に迎え、ダニエルが六九年に北川の急死の後を受けてＷＣＣ―ＵＩＭの幹事に就任したとき、彼は呉在植 (オ・ジェシク) に話しかけ

て、ＥＡＣＣ―ＵＩＭの幹事に迎え入れた。その間彼は一九六八―七三年にその委員会の委員長をつとめた。彼との交流が深かった呉在植は彼の活動に見るカリスマ性を感嘆の想いで述べている（「彼はキリストの手紙でした」『友へ』二一〇―二一六頁）。

竹中は求められてアメリカの神学校、大学の訪問教授をつとめた。一九六二年九月―六三年八月にニューヨークのユニオン神学校、一九七三年八―一二月にイェール大学、一九八一年九月―八二年七月にハーヴァード大学でキリスト教社会倫理学関連の講義を担当した。各地の教会、大学関係における講演は枚挙にいとまがないであろう。彼がアメリカの学生たちに話すとき、次のような追憶があった、という。彼がまだイェール神学校の学生であった頃、Ｐ・ティリッヒ（Paul Tillich）の説教を聴いた。例のドイツ訛りで重厚な述語の話が約四五分間続いた。これを聴いたある学生が、あれはよくない、too long and no jokeといった。そこで自分が話をするときは、必ずjokeを一つ、二つ入れ、話は二〇―二五分間、後はディスカッションにするようにつとめている、という（自伝稿『生命の泉……』）。しかし、jokeだけでは人は満足しないであろう。彼の書物には、God is RiceとかWhen the Bamboo Bendsといったタイトルを見るだけでも、平明であるが、含蓄のある語句が並んでいた。そこで彼からもっと話を伺いたいと思う人たちが現われても不思議ではなかった、と思われるのである。

5　著作活動

彼の国内外の活動と関連した著作についてはそれぞれの箇所で述べた。本節ではまず初期の重要な三冊の著作について述べる。

（1）彼は国際的な活動家らしく最初の著作を *Reconciliation and Renewal in Japan* (SVM and Friendship Press, 1957) と英文で刊行した。第1節で述べた彼の博士論文がその素地になっていることは明白である。彼は自分の著書に特色のある名称を付けるが、ここでもそうである。彼は言う。神は贖罪的愛をもって人間の歴史に働きかけておられる、その愛に生かされている教会は、特別な人間関係相互の和解（Reconciliation）とそのための伝統的文化や慣習の革新（Renewal）という使命を持つ、という（p.9）。彼はそれを日本における封建社会より近代社会への移行、資本主義産業社会の出現、国家主義、軍国主義の興隆、そして戦後の激動状況におけるキリスト者や教会の固有の業の中に見ようとした。それは浜の真砂のなかに光り輝くものを見出そうとする至難の業であるが、彼は持ち前のおおらかさをもって日本人キリスト者の弁証的活動としてこれに挑戦していった。

（2）彼は同志社大学に赴任後、『基督教研究』や共編著の論文集でキリスト教倫理学やエキュメニカル運動などの論文を寄稿し、またCSの共同研究に携わっていた。これらをいち早くまとめて出版したのが、彼の日本文最初の著作『真人の共同体――現代社会における教会の課題――』（新教出版社、一九六二年）である。彼は本書で、K・バルト（Karl Barth）、さらにD・ボンヘッファー（Dietrich Bonhoeffer）に学びつつ、キリストによって真のものに生きる人間とされたキリスト者の共同体としての教会の課題を提言する。そして教会は絶えず改革の過程にあるというプロテスタンティズムの精神に立脚し、教会が世のための教会となるときはじめて教会となるというD・ボンヘッファーのことばを掲げ、そのために教会自身の自己閉塞的で保身的な体質の革新を警告した。そして「成人した世界」（D・ボンヘッファー）、また「急激な社会的変革」（エヴァンストン大会以後の用語）が生じているアジア世界の全領域における教会の複合的かつ連帯的な証の重要性を提唱する。彼は日本人キリスト者として社会科学的状況認識、倫理的価値判断、神学的洞察の必要性を述べるが、最後にはキリストにある新しい創造、そこに生きるユーモア、そし

て希望の教会の喜びを語るのである。本書は、彼がある種のゆとりを持ちつつも、全力投球で執筆した著作である。

（3）彼はCS研究会で地域教会の資料収集に協力し、それをもって大著『倉敷の文化とキリスト教』（日本基督教団出版局、一九七九年）を執筆し、刊行した。彼はイェール神学校在学中にL・ポープの宗教社会学に学んだ。L・ポープは北カロライナ州のガストニアの綿織物工場で一九二九年に起こったストライキを取りあげ、その問題に対する教会の対応、その背後にある教会とセクトの関係、社会的階級と宗教の関係などを綿密に分析し、その積極的関係を提示した（*Millhands and Preachers*, Yale Univ. Press, 1942）。彼はこれに刺激を受け、その提示した宗教社会学的仮説が倉敷にあてはまるかどうかを考えた。彼は留学より帰国後半年間倉敷教会長期応援教師として活動したが、これが彼の執筆をたすけたことは既に述べた。彼は人文研でマイクロフィルム化された膨大な倉敷教会資料を用いてこの大著を完成した。これはある社会の文化とキリスト教の関係をその地域の教会にみようとする彼独自の教会史研究である。

石で組まれた塀に白壁の倉が軒を連ね、緑の柳が川面に揺れ、美術館、民芸館が建ち並ぶ倉敷の人たちの中に彼は独自の伝統的な精神的資質をみた。彼は彼らに内在する天領の治外法権意識から、逃亡者に対する庶民的義侠心が生まれ、これがキリスト教に触発されて隣人に尽くす行為になったとし、その具体的な事例として、不敬罪に問われて投獄された山川均を大原孫三郎が訪れ、義兄林源十郎（I）がそのために配慮したことを挙げる（一一九頁以下）。彼は岡山、倉敷の伝道開始から戦時下にいたるまで実業家、公務員、商人、教師、農民、漁民などいろいろな職業の信徒たちの生き生きとした人間像を描き出した。エキュメニカル運動において信徒の重要性を強調した彼の主張が、そこに見られるのである。組合教会総会中止を求めた憲兵の要求を拒否し、教会の内情を調べようとする特高の質問を軽くあしらった林源十郎（II）の挿話も記されている（三八七―八八頁）。組合教会の戦時協力の呼びかけ、日本基督

教団の成立といった問題の中を生きたこの地方教会のしたたかな歩みを彼は共感的に述べている。

ＣＳ研究会で一〇年の研究調査にもとづき出版された『松本平におけるキリスト教――井口喜源治と研成義塾――』（同朋舎出版、一九七九年）にも彼は論文を執筆している。これも彼の地域教会史研究の一環である。「アルプスの山々のどっしりとした風情は変りなく、安曇野を流れる万水川の水は今も豊かである。今日、地方に生きる民衆の生きざまがとわれ、画一化された教育の危機が指摘され、キリスト教の土着化の要が説かれているとき、井口喜源治が研成義塾を通して試みた教育の理念と実践はわれわれに示唆するところが少なくないと思う」（ｖ）と彼が「はしがき」で述べたことばが、彼の井口喜源治（一八七〇―一九三八年）への共感と今日における教育の課題を率直に表明している。

彼の論稿「和服のキリスト者――井口喜源治の信仰（２）――」は、井口に関する現存の資料をあまねく調査し、安曇野に生きたキリスト教主義教育者、日本の土壌に根付いたキリスト教の言説をよく伝えている。もう一つの論稿「教友会――『新故郷』の人びと（２）――」は井口に学んだ教え子で一九一〇年代にアメリカ・シアトル付近に移住した人たちの苦難の歩みを克明に伝える。そこで井口のことばを覚え、移住した土地と人々を愛した彼らの生き方に国際的な日本人の先駆的意義を彼は見出すのである（一九三頁）。

なおこれまで述べた地域教会史研究の範疇に該当する論文として「初期の同志社と松山の人びと」（『ＣＳ研究』一九八八・三）、“Characteristics of Leadership in the Japanese United Church in Canada—Case Study of Yoshimitsu AKAGAWA and Kosaburo SHIMIZU”(op. cit., 1992.7) がある。また在米日本人キリスト者で波乱の生涯をたどった実業家とその娘である作家の伝記『異文化・交流のはざまで――内田淑子のルーツと生涯――』（思文閣出版、二〇〇五年）もこれに関連する著作になるだろう。

以後本節は定められた枚数の関係で箇条書きとする。

（4）日本人キリスト者の人間像　「森本慶三の人と思想」（CS編『日本の近代化とキリスト教』新教出版社、一九七三年）、「宮崎安右衛門（童安）の聖貧道」（人文研編『「六合雑誌」の研究』教文館、一九八四年）、「田中正造の聖書観」（『CS研究』一九八九・三）、「改めて注目される新井奥邃」（『福音と世界』二〇〇〇・七）、「良寛を敬慕したキリスト者たち」（『基督教研究』一九九一・三）、『良寛を愛したキリスト者　小倉章蔵の生涯』（日本基督教団出版局、一九九二年）、『良寛とキリスト　大宮季貞の生涯をたどって』（老古堂書店、一九九六年）、『和服のキリスト者　木月道人遊行記』（日本基督教団出版局、二〇〇一年）

（5）日本、アジアにおけるキリスト教と文化　"Christian Encounter with Men of Non-Christian Faiths in Japan" (*Studies in the Christian Religion*, 1965.3), "A New Doxology of the Community of the First Fruits - Christ and Culture in Japan" (op. cit., 1966.8),「神は飯（メシ）である――アジアの現実における神学」（『福音と世界』一九七七・五）、*God is Rice: Asian Culture and Christian Faith* (World Council of Churches, 1986),「日本におけるキリストと文化」（『福音と世界』一九九二・二）、*When the Bamboo Bends: Christ and Culture in Japan* (WCC Publications, 2002)

（6）アメリカン・ボード宣教師　「ニューイングランド・ピューリタニズムと日本伝道――アメリカン・ボード日本開教100年を迎えて――」（『同志社アメリカ研究』一九六八・九）、「D・C・グリーン研究――アメリカンボードの背景と日本伝道の開始――」（同上誌、一九七七・三）、「同志社の宣教師たち――明治期」、「大正・昭和前期の宣教師たち」（いずれも『同志社百年史』一九七九年）、「宣教師J・L・アッキンソンの伝道とその性格」（『基督教研究』一九八八・四）、「排耶論にこたえた宣教師たち――M・L・ゴードンとJ・L・アッキンソンの場合――」（人文研編

『排耶論の研究』教文館、一九八九年)、『C・B・デフォレストの生涯――美と愛の探求――』(創元社、二〇〇三年)

(7) 組合教会関係の人たち　「小崎弘道における国家思想の展開――明治前半期を中心に――」(人文研編『熊本バンド研究　日本プロテスタンティズムの一源流と展開』みすず書房、一九六五年)、「海老名をとらえる視点――海老名の神学思想についての一考察――」(『CS研究』一九七五・三)、「中島重――人格社会主義の先駆者――」(和田洋一編『同志社の思想家たち』下、同志社大学生協出版部、一九七三年)、「内ヶ崎作三郎における人間と文化」(人文研編『「六合雑誌」の研究』前出)、「ナタナエルの信仰――エキュメニカル運動における小崎道雄――」(『CS研究』一九八四・三)、『土に祈る――耕牧　石田英雄の生涯』(教文館、一九八五年)、「『七一雑報』の論説の研究」(人文研編『「七一雑報」の研究』同朋舎、一九八六年)、「日本組合基督教会の歴史と課題――その百年に当たって――」(『基督教研究』一九八七・三)、「『新人』における宗教思想」、「『新人』『新女界』における宗教と美術」(いずれも人文研編『「新人」「新女界」の研究　二〇世紀初頭キリスト教ジャーナリズム』人文書院、一九九九年)、「吉野作造の朝鮮観　二・八宣言と東京朝鮮YMCA問題」(『福音と世界』二〇〇四・三)、「山室軍平の周辺――バックストンと山田弥十郎をめぐって――」(人文研編『山室軍平の研究』同朋舎出版、一九九一年)

(8) 各個教会史　「総論　捨身で生きた牧会者――牧師田崎健作の生涯」(『白骨の進軍　伝道者田崎健作の信仰と生涯』日本基督教団弓町本郷教会、一九八一年)、「本郷教会の人びと――明治・大正期を中心として――」(『弓町本郷教会百年史』同、一九八六年)、「胎動期」、「誕生期」、「編集後記」(いずれも『京都教会百年史』日本基督教団京都教会、一九八五年)

(9) キリスト教と美術　『聖書のことば　現代日本美術とともに』(創元社、一九六六年)、*Christian Art in Asia* (Kyo Bun Kwan in Association with CCA, 1975),『天寵の旅人　画家 宮芳平の生涯と作品』(日本YMCA同盟出版部、

一九七九年)、編著『渡辺禎雄聖書版画集』(新教出版社、一九八六年)、Ed. and Con. *That All May Be One: A Guide for Christian Art in Asia* (Asian Christian Art Association, 1987), Co-Ed. and Con. with Megumi Yoshida, *Consider the Flowers - Meditation in Ikebana* (Kyo Bun Kwan, 1990), Co-Con. with Ron O'Grady, *The Bible through Asian Eyes* (Pace Publishing in Association with Asian Christian Art Association, Kansai Seminar House), "Mission in Expectation of the Dawn" in Co-Ed. with Godwin R. Singh, *Mission and Art* (CCA and Asian Christian Art Association, 1994), Co-Ed. and Con. with Alison O'Grady, *The Place Where God Dwells: An Introduction to Church Architecture in Asia* (op. cit., 1995),「アジアにおけるキリスト教美術　ソウルでのＡＣＡＡ二十五周年記念会に出席して」(『福音と世界』二〇〇三・一〇)、「プロテスタントのキリスト教美術」(神田健次編『講座　日本のキリスト教芸術２　美術・建築』日本基督教団出版局、二〇〇六年)、『美と真実　近代日本の美術とキリスト教』(新教出版社、二〇〇六年)

(10) キリスト教学校など　「初期の同志社――神学教育と伝道活動」(『同志社百年史』一九七九年)、『信仰の旅人たち――頌栄90年の歴史に学ぶもの』(頌栄短期大学、一九八〇年)、『輝ける星の如く――神戸キリスト教青年会百周年を記念して』(神戸ＹＭＣＡ、一九八六年)、*Shine as Lights in the World: A Brief Account of the Centennial History of Kobe YMCA* (Kobe YMCA, 1986),『松蔭に薫るもの　松蔭女子学院創立百周年記念講演』(松蔭女子学院、一九九二年)、『勝海舟と新島襄　新島講座第14回東京公開講演会』(同志社、一九九四年)、創刊五〇号記念エッセイ集　キリスト教社会問題研究会と私「はじめにパトスありき」(『ＣＳ研究』二〇〇一・一二)、『ゆくてはるかに　神戸女子神学校物語』(教文館、二〇〇〇年)

7　晩年

一九九六年に竹中は同志社大学を定年退職し、名誉教授に遇された。それと同時に彼は聖和大学教授に招かれた。この大学はこの年に設置した人文学部にキリスト教学科と英米文化学科を置いた。彼は後者の学科に所属したが、単に英米文化を紹介するのではなく、そこに内在するキリスト教の思想的底流を教えることを期待された。彼が学部と大学院で担当した科目を見ると、これは明白である。彼に学んだ一学生は、彼のことばに生の原点を知った、という（生駒幸子、『友へ』八一―二頁）。

聖和大学はもと聖和女子学院といわれ、神戸女子神学校とランバス女学院が一九四一年に合同した学校であった。彼は「かよわきこの身を　みくにささげぬ　はるけきゆくてを　主よみちびきてよ」と歌った女子神学生に深い共感といまは亡きこの神学校に哀惜の念をもって『ゆくてはるかに　神戸女子神学校物語』を二〇〇〇年に刊行し、そこに教師と学生の人間模様を描き出した。

このような人間愛に満ちた著作の背景に、実は痛惜の体験が彼にあった。彼の妻文子の死（一九九九・三・一一）である。彼女はおおらかな性格で人々の善意を信頼し、積極的に活動する彼を暖かく支え、励まし、喜んで行動をともにした姉さん女房であった。その彼女が一九八六年に体の異常を覚えて病院で手術して以来、十数年間体の調、不調が続いた。彼の看護の努力は大変なものであった。彼はその経過と自己の想念を『福音と世界』（二〇〇〇・四）に発表し、さらに章を付け加えて『生と死のはざまで――妻をしのびて――』（キリスト新聞社、二〇〇二年）を刊行した。彼はそこで、生と死の問題を実存的にとらえ、伴侶を失ったものの寂寥感を訴え、家族を失った西田幾多郎、中川秀恭、阿部六郎、大林浩などのことばを伝える。それは十字架と復活によって生と死をきりひらいたイエス・キリ

ストへの信仰に貫かれている。

正夫は文子の死後一心不乱に著作の執筆に没頭し、次々とそれを刊行した。たしかに彼は独りで日常生活をこなすタフなひとであった。しかし心の中にひろがる空虚な孤独感を避けることは出来なかった。黒瀬百合子との出会いで彼はそれを克服した。彼は当時神戸女学院の理事を委嘱されていたが、彼女はそこに働いていた聡明な女性であった。彼らは二〇〇二年一二月二六日に結婚した。彼は京都と西宮を往復しつつ四季折々の自然を見事に撮った彼女の一二枚の写真に自分を支えていることばをあわせて『年々歳々』（二〇〇五年）を刊行した。

二〇〇六年五月に彼は黄疸症状が現われたので入院したが、胆管癌の告知を受け、手術の結果小康を得たが、動脈瘤破裂で八月一七日に絶命した。彼の逝去を悼む多くの人たちが京都教会における葬儀に出席した。彼の召天一周年記念会がその日に竹中家によって新島会館で開かれ、約二〇〇名が出席した。百合子が編集・発行して出席者に当日贈呈した『友へ　Sincerely Yours』には彼を敬愛する一五〇名以上におよぶ国内外の人たちの真心のこもった文章に彼の遺稿、国内外の活動を伝える新聞記事、写真、そして彼の年譜が掲載されている。